



<原著>医療英語(1) : How To Read Medical English(人文社会科学系)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平井, 美津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010856

講座

医療英語 (1)

—How To Read Medical English—

平井美津子*)

(大阪府立看護大学医療技術短期大学部)

Medical English (1)

—How To Read Medical English—

Mitsuko Hirai*)

(Osaka Prefectural College of Health Sciences)

Key words: 医療英語; 不可算名詞; 不定冠詞; 分詞構文; 継続用法; ジャーナリズム英語

1. はじめに

Medical English というと何か特別な英語を読むのではないかと気負ってしまうかもしれないが、決してそうではない。Medical English は文学作品とは一線を画した「理科系の英語」(志村史夫, 1995) の一種で、特に医療分野の英語のことをいう (一般に Medical English は日本語で「医学英語」と訳されているが、ここでは医学のみならず薬学、看護学、栄養学などを含む広い範囲の医療分野の英語を指す意味で「医療英語」とする)。

そもそも自然科学で用いる言語は論述するための言語である。一方、文学を始めとする芸術の世界ではイメージを重視し、人間の感情を表すことに重点が置かれる。自然科学で用いられる言語は比喩表現を避け、できる限り現実を端的に表すことが要求される。10年以上にわたる医療翻訳の現場での経験からいえることは、特に英語に関していえば、人間の心情を表すために必要である英文法の最終段階に習得する「仮定法」はほとんど必要なく、さらに行間を読ませるような文章は曖昧性が高くなることから好まれないということである。しかし一方では簡潔明瞭を主眼とすることから、言いたいことを次々挿入する傾向があるため文が思いのほか長くなり、むしろ複雑になることも多い。

本稿では、簡潔明瞭に言いたいことを伝えるのが使命である Medical English の中でも基本的事項であるのに

もかかわらず意外に誤訳が生じやすい3点、すなわち数えられない名詞と不定冠詞、接続詞 *and*、前置詞 *by* と *with* について実例をあげて解説する。最後に Medical English に特別な英語というイメージを与えている分詞構文、関係詞の継続用法 (非制限用法) の功罪についても触れておく。

2. 数えられない名詞と不定冠詞

Medical English を始めとする自然科学系の英語では名詞の果たす役割が非常に大きい。そのため日本語とは違った英語の名詞の概念を習得しておく必要がある。しかし難解な構文暗記に終始しがちな大学受験の英語では、名詞の概念の習得はほとんど見過ごされているため、実際に社会人になって現場で英文を書く段階になって初めて「この名詞は複数形にするのか、不定冠詞の *a* をつけるのか、定冠詞の *the* をつけるのか、それとも無冠詞なのか」という細かい点でとまどってしまう。しかし1文の中に名詞は多数存在し、その都度考えをめぐらすようになると前へ進んでいかないことになる。名詞がでてきたら無条件に *the* をつけて済ます強者も現実には少なくない。

日本語には存在しないが、英語の名詞は形態的に2種類に大別できる。すなわち数えられる名詞 (可算名詞) と数えられない名詞 (不可算名詞) である。数えられる名詞とは *a(n)* や *many* のような「数」を表す修飾語がついたり、複数形になったりするのが特徴である。一方数えられない名詞は常に単数形で *a(n)* はつかないが、

*) 非常勤講師

much のような「量」を表す修飾語がつくのが特徴である。しかし1つの名詞が数えられる名詞にも数えられない名詞にも用いられることが多く、下の例のように形態上の違いが意味の違いを引き起こすことになる。

This metal is copper. (この金属は銅[Cu]である。)

He had only a few coppers. (彼は数枚の銅貨しか持っていなかった。)

一般に数えられない名詞に *a(n)* がつくると抽象的な意味が「ある程度」具体性を帯びる。例えば下の2文には微妙な意味の違いがある。

A. Loss of weight may result from cancer.

B. Loss of weight may result from a cancer.

日本語に訳すると2文とも同じ意味(癌になると体重が減少する可能性がある)になるが、AとBでは癌の捉え方が違う。すなわちAでは癌という病気全体を総称的な抽象概念として捉えているのに対し、Bではある一種の癌(a kind of cancer)の存在が示唆され、抽象的に表されていた“cancer”が「ある程度」具体性を帯びる。ただし“the cancer”の場合と違って「特定」の癌を示しているわけではない。このような微妙な意味の違いは、私を含め日本で英語教育を受けた者にとって理解しにくいものなのである。

英語のネイティブスピーカーは英語の名詞の概念を捉える能力を持っているが、私たち日本人は、英語教育の中で名詞の概念を捉える能力を「習得」しなければならない。このことから、まず名詞の概念を捉えるのにある程度の「理屈」が必要となってくる。特に日本人は英語の名詞には何らかの冠詞がつきものであるという固定観念が強く、無冠詞の名詞が単独で文中に現れるととまどいがちである(とまどうのはまだよい方で、全く気にならないという場合の方が多い)。そこで名詞をみたら基本的な目安として不定冠詞 *a(n)* があるかどうか、複数形になっているか、無冠詞であるかどうかによってその名詞が数えられる名詞、数えられない名詞のいずれであるかを判断する習慣が必要なのである(定冠詞 *the* は数えられる名詞にも数えられない名詞にもつくことが可能であるので、判断材料として適しない)。冠詞のつけ方にもしばしば例外があるので迷うことが多いが、名詞の概念がある程度把握できれば不自然な冠詞(無冠詞を含む)の選択は「かなり」避けられるはずである。

3. 接続詞 *and*

文法的に *and* は「等位接続詞」と呼ばれ、「～と…」という意味で並列的に語・句・節を結ぶ基本単語である。しかし“Mary and Jane are sisters.”というような単文の中で語を結ぶ役割をしている場合には問題ないが、この *and* が句や節を結ぶような場合、かなりの英語力のある学生でも混乱をきたすことがしばしばある。その理由として句や節を結ぶことによって文が長くなるということ、さらに句や節を結ぶことによって1文中に2つ以上の *and* が現れることもあるため頭の中が混乱するという点があげられる。例えば、

Judi was then able to talk with Mrs. French about her fears and concerns and offer a positive outlook by explaining that breast cancer, when detected early, has a good prognosis.—*Applying Nursing Process*

(Judiはその時 French 夫人と不安や悩みについて語り合い、乳癌は早期に発見できれば予後はかなりよいことを説明し、前向きな考えを持つように言うことができた。)

この場合最初の *and* は“fears”と“concerns”という名詞を並列に結んでいるが、2番目の *and* は“talk with Mrs. French about her fears and concerns”と“offer a positive outlook by explaining that breast cancer, when detected early, has a good prognosis”という動詞句を並列に結んでいることになる。さらに1文に *and* が3つ現れた場合はさらに複雑になる。

If serum cholesterol was 5.5 to 8.0 mmol/L, serum triglyceride was ≤ 2.5 mmol/L, and the patient was compliant and still eligible, final informed consent was obtained and the patient was randomly assigned to treatment with simvastatin 20 mg or placebo...—*Lancet* Nov. 19, 1994

(血清コレステロール値 5.5–8.0 mmol/L, 血清トリグリセリド値 2.5 mmol/L 以下で、患者が治療に応じ、なおかつ適している場合、最終的なインフォームドコンセントを得た上で患者は 20 mg シンバスタチン群とプラセボ群に無作為に分けられた。)

「A—B and C」というように *and* は一番最後の語・句・節の直前に置かれるのが原則である。その際 *and* が微妙な位置にあり、誤解を招く恐れがあると考えられる場合 *and* の前にコンマが置かれる(実際には省略されている

場合がよくある)。まず if 節内 (If serum...still eligible) をみると、

- ① serum cholesterol was 5.5 to 8.0 mmol/L, —A
 ② serum triglyceride was \leq 2.5 mmol/L, and —B and
 ③ the patient was compliant and still eligible—C

①～③の3文が並列に結ばれており、②の“and”により③が一番最後の文であることがわかる。③の“and”は形容詞“compliant”と“eligible”を並列に結んでいる。次に主節 (final informed...or placebo) では下の④⑤

- ④ final informed consent was obtained and
 ⑤ the patient was randomly assigned to treatment with simvastatin 20 mg or placebo

が並列に結ばれている。

このように Medical English では言いたいことを1文に表現する傾向が強いことから *and* は多用されるが、一方では文を複雑にしようとするということも起こりうる。*and* は一番最後の語・句・節の直前に置かれるということを中心に「名詞」と「名詞」, 「形容詞+名詞」と「形容詞+名詞」, 「不定詞」と「不定詞」, 「動詞+目的語」と「動詞+目的語」というように文法的に同種のもの(品詞と働き)を並列に結ぶという点がポイントである(不定詞の場合、文法的に言えば名詞的用法、副詞的用法、形容詞的用法があることから用法も同じでなければいけないということに注意)。

4. 前置詞 *by* と *with*

前置詞 *by* と *with* は Medical English の中で主に「～で」という日本語訳で頻出する重要単語である。しかし両者は基本的意味からさまざまな意味に派生し区別が曖昧な場合もあるが、ここでは *by* と *with* の基本的意味の違いについて説明する。

by は “a tree by the house” というように場所を表す前置詞で「～のそばに」というのが基本的意味である。そこから「ある目標物のそばに」近づくための「手段・方法」を表す意味に派生している。さらに *by* はさまざまな意味に派生しているが、Medical English ではこの「手段・方法」の意味で用いられることが多い。また受け身の場合 *by* で「動作主」を表すというのは一般的である。

A child is immunized by vaccines which are injected

or given by mouth.—*Facts for Life*

(子供は注射または経口によるワクチンで免疫を得る。)

一方 *with* は “tea with lemon” というように「～と共に、～と一緒に」という「同伴」の意味が基本で、その中には2つの物(あるいは人)の存在が示唆されている。そこから派生して「～を持っている」という「所有」の意味が生じ、さらに「道具を持って使う」という意味から「～を使って」という「手段・道具・材料」の意味にも派生している。*with* もその他さまざまな意味に派生しているが、下の例文のように

The present trial was designed to evaluate the effect of cholesterol lowering with simvastatin on mortality and morbidity in patients with coronary heart disease (CHD)—*Lancet* Nov. 19, 1994

(本試験は虚血性心疾患患者の死亡率、罹患率に対してシンバスタチンでコレステロールを低下させることが及ぼす影響を評価するために計画された。)

The disease that succumbed earliest and most dramatically to the mass campaign was yaws, treatable with antibiotics.—*The State of the World's Children*

(大規模なキャンペーンに最も早く最も劇的に屈した病気がイチゴ腫で、抗生物質で治療可能であった。)

Any injection with an unsterilized needle or syringe is dangerous.—*Facts for Life*

(滅菌されていない針や注射器での注射はどんなものでも危険である。)

Medical English では「～を持っている」「～を使って」という意味が中心となる。すなわち「持っている」ものが病気であったり、道具や材料・物質「を使って」という意味となることが多い。

5. 分詞構文と関係詞の継続用法の意義

分詞構文と関係詞の継続用法という文法用語を聞くだけで、Medical English は難しいとの先入観を持ってしまう人が多い。分詞構文とは分詞が接続詞と動詞を兼ねた働きをし、主文全体を修飾する副詞句を作って文を短くする構文のことをいう。一方、関係詞の継続用法とは通例関係詞の前にコンマがあり、先行詞について内容を補足的に説明する用法のことをいう。確かにこの文法的な説明だけでは難しいという感が否めない。しかしこれらは重複部分を省略して文章を引き締め、リズム感のあ

る文体を生み出す効果があるということからジャーナリズム英語では好まれる文体である。実際に英字新聞では多用されている。

In the second operation, which is scheduled to be conducted about six months later, doctors will construct a simulated male genital organ for the patient, who has a gender-identity disorder and was identified by the male alias Keiichi Nakahara. Since childhood, the patient had problems accepting her female body and had been living the life of a man for nearly 10 years, taking jobs as a construction worker while receiving regular doses of male hormones.—*The Japan Times*, Oct. 17, 1998

(2度目の手術は約6カ月後に予定されており、医師団は模造した男性性器をその患者に装着する。彼女は性同一性障害で、男性名ナカハラケイイチを名のっていた。子供時代からその患者は女性の身体であることに違和感を持っており、かれこれ10年間、一定量の男性ホルモンを受け、建設作業員として仕事をしながら男性としての生活を送ってきた。)

同様に Medical English においても同じような主旨で多用されている。

Looked at from a statistical standpoint, cancer ranks second to the diseases of the heart among the leading causes of death in the United States. The average death rate from cancer per 100,000 population per year is currently about 197, which means that there will be an estimated 462,000 deaths from cancer in the United States in 1985.—*Hospice*

(統計的観点からみれば、癌は米国において主な死亡原因のうち心疾患に次いで2位である。1年で人口10万人あたりの癌の平均的死亡率は現在約197人であることから、1985年のアメリカの推定癌死亡者数は462,000人であることになる。)

分詞構文、継続用法ともに“when”, “as”, “because”, “if”, “and”, “but”などの接続詞と主語を内包しているという点が特徴である(継続用法の場合、関係詞の種類により主語でない場合もある: e. g. He was born in 1941, when [= and in 1941] World War II broke out.)。しかし両者ともに内包されている接続詞や主語の判断を読み手にゆだねる形となるため、読み手の内容に対する知識不足から誤訳が生じることがあるのが欠点である。簡潔明瞭な文体を重視するあまり書き手の意図が間違った形で

伝わるという矛盾が存在するという問題点があることを念頭に分詞構文、継続用法に慣れる必要がある。

6. おわりに

今回、主として Medical English を読むための注意すべきポイントを述べた。前述したように Medical English は言いたいことを次々と挿入していく傾向があるため文が長くなるきらいがある。しかしどんな長い文章も5文型のいずれかに属するのが英語の基本であることから、まずその文の中心の動詞はどれか、それに対する主語の部分や目的語、補語の部分はどこまでかということを中心に捉えて読む習慣が大切である。

最後に思考がまさに Medical English であるとみなされる看護学生にとっては非常にポピュラーな文章を紹介する。

Every woman, or at least almost every woman, in England has, at one time or another of her life, charge of the personal health of somebody, whether child or invalid,—in other words, every woman is a nurse. Every day sanitary knowledge, or the knowledge of nursing, or in other words, of how to put the constitution in such a state as that it will have no disease, or that it can recover from disease, takes a higher place—F. Nightingale, *Notes on Nursing*

□で囲んだものが中心の動詞、網掛け部分は挿入部、下線部は主部。

(英国では女性の誰もが、あるいは少なくともほとんどすべての女性が、一生のうち何回かは、子供とか病人とか、とにかく誰かの健康上の責任を負うことになる。言い換えれば女性は誰もが看護婦なのである。日々の健康上の知識や看護の知識は、つまり病気にかからないような、あるいは病気から回復できるような状態に身体を整えるための知識はもっと重視されてよい—看護覚え書より。)

上記は有名な Notes on Nursing (看護覚え書) 序文から抜粋したものである。序文のみならず、ナイチンゲールの著作では次々と言いたいことが挿入されており、また分詞構文や継続用法が多用されている。さらにイギリス英語であることから、アメリカ英語中心の英語教育を受けてきた日本人にとっては慣れるまでかなり難しく感じる文章である。しかし100年以上前の英語にかかわらず決して古い英語ではなく、イギリスの上流家庭で高い教育を受けた彼女の生まれ育ちを反映して、高度で理知的な英語となっている。そのため看護領域の学問を追究する者にとっては原著で彼女の著作を読むことは

非常に重要である。最初は日本語と対比させながらも Notes on Nursing を一通り読み通すことで、Medical English もかなり身近なものになると考えられる。

最初に述べたように Medical English は特別な英語ではない。ただ簡潔明瞭を第一とすることから、言いたいことを次々挿入する、重複部分を省略するという傾向が強いという特徴をふまえた上で「文字通り」読んでいくという流れに慣れれば決して難しい英語ではないのである。

文 献

- Alfaro, R. (1998) "Applying Nursing Process", Lippincott, New York.
- Alfaro, R. (1994) "Applying Nursing Process", Lippincott, New York. [江本愛子ほか訳 (1996) "基本から学ぶ看護過程と看護診断", 医学書院, 東京.]
- Nightingale, F. (1974) "Notes on Nursing", 現代社, 東京. [湯楨ます ほか訳 (1995) "看護覚え書", 現代社, 東京.]
- 大西泰斗ほか (1996) "ネイティブスピーカーの前置詞", 研究社, 東京.
- Scandinavian Simvastatin Survival Study Group (1994) Randomised trial of cholesterol lowering in 4444 patients with coronary heart disease. *Lancet*, 344:1384.
- 志村史夫 (1995) "理科系の英語", 丸善, 東京.
- 高梨健吉 (1970) "総解英文法", 美誠社, 京都.
- 田中健二 (1998) The New York Times 中の分詞構文. *時事英語学研究*, 37:95-106.
- 植村研一 (1993) "うまい英語で医学論文を書くコツ", 医学書院, 東京.
- UNICEF (1996) "The State of the World's Children", Oxford University Press, Oxford.
- UNICEF, WHO, UNESCO and UNFPA (1993) "Facts for Life", P & LA, Oxford.
- 横井川泰弘 (1994) "楽しく学ぶ医学英語", 金芳堂, 京都.
- Zimmerman, J.M., et al. (1986) "Hospice", Urban & Schwarzenberg, Baltimore.

(受付日 1999 年 10 月 13 日, 受理日 1999 年 12 月 17 日)